

(8) 力の高揚と充足の感情としての陶酔（「或る反時代的人間の偵察行」の8）

芸術や美的行為や観照の「生理的先行条件」は「陶酔(der Rausch)」である。この「陶酔」には様々なものがある。それは「性的興奮」という「最も根源的な形態」の「陶酔」から始めて、「祝祭の陶酔」、「競技の陶酔」、「勝利の陶酔」、「残忍さの陶酔」、「破壊の陶酔」、「麻酔の影響による陶酔」、さらには「意志の陶酔」等々である。これらの「陶酔」の本質的なものは「力の高揚と充足の感情(das Gefühl der Kraftsteigerung und Fülle)」である。ただ、この感情から事物に暴力が加えられることがある。その経過は「理想化(Idealisiren)」と呼ばれるが、ここには「偏見」がある。「理想化」とは、「些細なもの」や「副次的なもの」を取り去ることではない。「理想化」の決定的なことは主要特徴を際立たせることであり、その結果他の特徴が消失してしまうことである。

(9) 芸術家ラファエルとキリスト者パスカル（「或る反時代的人間の偵察行」の9）

「見るもの、欲するものすべて」を「彼自身の充実」から「豊かにする」人間は、事物を「変容」させ、その事物は人間の「力」を反映し、その「完全性の反射」となる。この「完全性へ変容せざるをえないこと」が「芸術」である。「芸術」において人間は自分を「完全性」として享受する。これと反対の状態、「反芸術家的状態」はすべての事物を「貧困化し、稀薄にし、消耗せしめる」。歴史はそのような「反一芸術家」に満ちている。例えば、「純粋なキリスト者」であるパスカルの場合がそうである。そもそも同時に「芸術家」であるような「キリスト者」は現われない。「然りを言い、然りを為した」ラファエルは「キリスト者」ではなかった。

(10) アポロンのとディオニュソスの（「或る反時代的人間の偵察行」の10）

「陶酔のあり方(Arten des Rausches)」としての「アポロンのとディオニュソスのという対立概念」とは何か。①「アポロンの陶酔」はとりわけ「眼を刺激し」、「眼」は「幻視の力」を獲得する。画家や彫塑家や叙事詩人は勝れた「幻視家」である。これに対して、②「ディオニュソスの」陶酔は、「全情動体系(das gesammte Affekt-System)を刺激し、高揚させる」。その本質的なものは「形態変化の軽快さ」である。「ディオニュソス的人間」は最高度の「伝達能力」をもっていると同様に、最高度の「理解し洞察する本能」をもっている。彼はどのような「皮膚」のなかへも、いかなる「情動」のなかへも入っていき、「絶えず変容する」のである。

われわれが今日理解している「音楽」は、同じように「情動の全興奮、全放出」ではあるが、ただその「表現の残滓(das Überbleibsel)」であり、「ディオニュソスの演技の単なる残存物(ein blosses residuum)」に過ぎない。われわれは「特殊芸術としての音楽」を可能にするために、いくつかの「感覚」、とりわけ「筋肉感覚(der Muskelsinn)」を静止させてきた。その結果、われわれはもはや自分が感じるすべてを「即座に身体的に模倣し表現すること(sofort leibhaft nachahmen und darstellen)」がない。この「身体的に模倣し表現すること」が「本来のディオ

オニュソスの正常状態」であり、「根源状態」であるが、今日の「音楽」は、「もっとも近い能力」である「感覚」とりわけ「筋肉感覚」を犠牲にした「根源状態の特殊化」である。